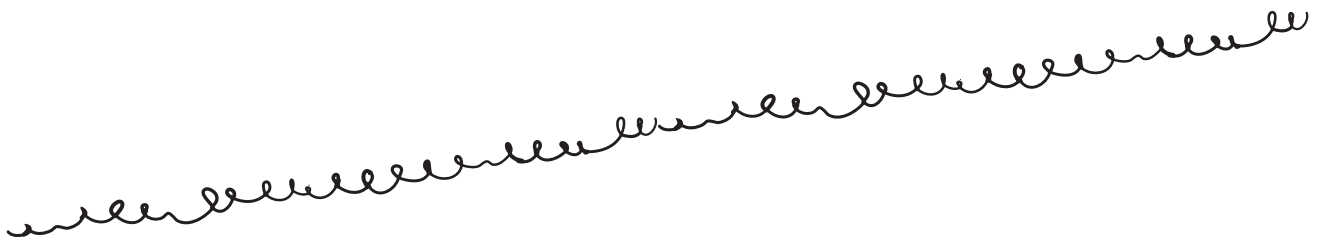


Spring up
Spring

は
ね
あ
が
る
春



Reviewer

小川智代 (creative studio & shop ooo オーナー)

西村ゆり (花屋にち)

はがみちこ (アートメディエーター)

展覧会をご高覧いただき、誠にありがとうございます。

Spring up Spring 展について、3名の方々に展覧会レビューを寄稿していただきました。
雑貨店のオーナー、お花屋さん、アートメディエーターと三者三様の文章を頂戴いたしました。
展覧会と併せてお楽しみいただけましたら幸いです。

DM をもらったときから、パツと明るいカラーに心を奪われどんな春が感じられるんだろうと思いつつもルンルン気分で楽しみにギャラリーへお伺いしました。

感想から言うところの作家さんも個性的でそれぞれの作風は全く違うし、離れて見るのと近くで見ると違う感覚で色使いもそうだけれど、その人その人の絵を描くクセみたいなものが、味として現れているのがとても面白かった。それぞれを比較して見られるのもグループ展のまた面白いところ。私の心に残った作家さんを何名かピックアップしてみます。

始めに DM の表紙になってる MAMEMI さんの絵が飛び込んできて、何枚も大きく飾られている作品は離れて見るとモザイクアートみたいにも思えたけど、近くで見ると色鉛筆で上下に何度も強く白い紙に塗りこまれた色が、絵というよりは柄に見えたけどその色使いだけで花のようにも見えるのが不思議な感じ。何枚も並べられた作品と、DM の表紙にも起用されていたフレームに入った作品 <はな> を見比べてよく見ると同じ作風だけれど、この <はな> って言う作品は白い部分も白い色鉛筆で繊細に塗りこまれていた。その白い部分が私は無性に好きだった。塗り忘れた白い余白ではなく、色鮮やかな絵の一部としてしっかり描かれた白は白ではないなと思わせてくれた。

次に正面にドーンと大きなお花の作品、渡辺あふるさんの <Waiting for the Sun> この作品の色使いがとても繊細で美しかった。ミントグリーンのような色の重なりが偶発的なものかもしれないけど、何色って明確に言えないけど、人の心の中や人それぞれの春や花を描くのにこの繊細なナイーブな感じのバランスがとっても素敵だった。なのにこんなに大きく大胆に描かれて並んでいる白いお花も柔らかくて見ているこちらの心を暖かくしてくれるような。だけどもなぜかちょっと寂しい、切ないみたいな気持ちも残る色、春ってまさにそうだな。出会いと別れの季節みたいな。こちらの勝手な解釈だけど、私はそんな風に感じた作品でした。大好きでした。

もう一人印象に残った作品は長村良彦さんの作品。この人のクセがすごいなーって圧倒されました。描くのも細かくて一つ一つ小さなパーツは離れて全体として見るのと近くで見ると違う印象だった。こんなにたくさん細かいパーツが密集しているのは、見ているこちらもパーツを追っていくのが大変だから描いてる方もすごい時間かかってそうだなと思ってこの執着心はなんなんだろうとかすごい根気があるなーって思ったけど、連続していくパーツは規則性があるようでないし、迷路に入って途中で行き止まりみたいな感覚にもさせられる。目で追っていくのが面白かった。テンプレート定規を使ってるって聞いたけど、<金色づくし> はエジプトかどっかの古代文字みたいに見えました。

他にも刺繍の作品なんかもあって、その場に行かないと感じられない作品ばかりでした。その場に行った空気感みたいなものもこのタイトルの Spring up Spring にぴったりでした。

明るい暖かい気持ちにさせてもらえました。ありがとうございました。

すきとおる緑。さわやかな風も吹いている。地面はふかふかとやわらかく、それでいて確かに、安心なのだろう。渡辺さんの花は、生きもののよう。ぱっと目をひらき、大きく広げた羽のような、からだを揺らす。白い雲からこぼれる日の光も、うれしそうに受け取って。どこか遠くへゆかなくても、ここが一番よいところと知りながら、気持ちよさそうに息をする。

輪郭はとても簡単になる。お互いに影響しあって、混ざりあって、かたちある、わたしたちは在る。MAMEMIさんの絵を見て、ふとそんなことを思った。色濃く塗りこまれた色鉛筆画。花も葉もそうではないものも、それぞれの色ではっきりと光を放ちながら調和する。一枚一枚はまったく違うのに、並んだ絵は境がなく、ひとつの明るい物語のようだった。

ひとも、木も、花も、鳥も、みんな地球の上で、群れをなしている。長村さんが描く、なにか、ではないものたちの集団。色もかたちも、多様なものが集まりつくるのは、音楽のようにゆたかな模様。それは、宇宙の銀河や、空気中の光の粒、雨上がりの植物のささやき、にも見えた。小さなひとつひとつを、長村さんはきっと、ときめきながら描いたのだと思う。

白い布に、平らかな線がのびる。ゆるやかに波打つ水面のように。なだらかな山の端や、草木をなでる風、あるいは、小さな起伏をくり返す日々のように。そっとふくらんで、傾き、いつのまにか絡まって固結びになって、そのまま、また進んでゆく。縫い終わり、ほどけたままの長い糸が何本もあった。西谷さんの描く線は、すべてを肯定する、大らかさに満ちる。

中村さんは、花のことばを知っているのだと思う。描かれた花は、のびのびとして、どこか気楽。親しい友人のような顔で、そこにいる。おしゃべりも聴こえてくる。展示作品と一緒にファイルが並んでいた。日々描きためられた季節の花が大切に綴じてある。どのページを開いても、目を細めた。描かずにはいられなくて、描いた。そんな愛くるしい花の絵だった。

中世ヨーロッパでペスト感染症が流行したのちには、“再生”を意味するルネサンスの時代が訪れた。ボッティチェッリの《プリマヴェーラ(春)》が象徴するように、それは暗い”冬”を抜けた先におとずれる”春”に喩えられる。だけど、はたして中世ヨーロッパに春がなかったかと問うてみれば、そんなことなかったはずだと思う。たとえ公に描き残されていなくても、その時代に生きた人たちもきっとまた、春のような陽気ムードをひそかに味わうこともあったんじゃないか。四季を大事にする日本に暮らしていると、はるかな時代を越えて共鳴しあう春のよるこびの普遍性を、そんなふうに感じたりもする。

いつにも増して待ちわびた今年の春は、ことさら短かった。すでに夏めいた日差しが照るなか、春をテーマにしたart space co-jinの「Spring up Spring 展」を訪れると、花をモチーフとして描かれた色とりどりの絵画たちに眩しく迎えられる。

緑と白を基調とする100号の大型平面の、渡辺あふるさんのお花畑はひときわ存在感を放ちながらも、他の作家の色彩豊かな小品たちを邪魔しない。普段はワンモチーフを画面いっぱい大胆に描くらしいが、この作品は調和を意識して描かれたそう。

花から受けたインスピレーションを色鉛筆でグリグリと矩形に塗り、数色を用いてリズムカルに構成するMAMEMIさん。同じ手法で続けられるシリーズながら、その色づかいはヴァリエーション豊かだ。内側に秘めたエネルギーを放出するように、塗り込められた画面上に潔い線を引く。

中村郷美さんは、墨やペンのドローイングで勢いよく花の輪郭を画面内に配置してから、花びらや額を彩色する。同じお花を繰り返し描いて抽象度の高い描きの型を作り(展示されているアジサイの型は秀逸)、ときには花瓶の花束や花の描かれたうちの画中画にも挑戦する実験精神の持ち主らしい。

西谷文孝さんの絵は、詩のカリグラフィーが転じたものだそうで、象形文字のような墨絵の花々が深みのあるポエジーを感じさせる。新しく取り組まれたという刺繍の制作は、縫い線の連なりが有機的に広がり、言語も記号も越えたメッセージを伝えるかのよう。

テンプレート定規で描く小さな愛らしいモチーフを画面に散りばめる長村良彦さんは、かっちりとした幾何学的な構成へのこだわりを感じさせる。針先のような自作の画道具に絵の具を乗のせて、何往復も運ぶ途方もない彩色作業を選び、1枚の絵に約半年の時間を込めるという。

描き手たちは、それぞれ独自の造形言語・造形手法をつむぎ続けてきたようだ。みずからの手で描くよるこびが、春めいた会場に満ちている。“春”的なものが中世には影をひそめていたように、おそらくこうした営みは非常にひそやかに続けられてきたものだろう。現代の感染症時代はまだまだ収束とはいかないが、弾むような春を描く人たちの営為は、以前も以後も、きっと変わらない。